

# 絵本作りの原点

## —私のブックスタート体験—

永山 綾



私が実家に住んでいたころ、兄の家が隣だったので、一番上の姪のNに毎週絵本を読んでいた時期があります。その楽しい時間は、Nの首が据わった生後四か月くらいから始まり、ちようど小学校に上がるまでの六年ほど続いたでしょう。まだ日本でブックスタート活動が始まる十年以上前の話です。

一九九二年にイギリスで生まれたブックスタート活動は、日本では二〇〇一年四月に当初十二市町村で実施し始め、二〇〇七年十一月三十日現在、実施自治体数は六三二（全国の市区町村数一八二三の約三十五％）にまで増加し、ますます活発に各地への広がりを見せています。○歳児健診時に、地域の人と保育者と赤ちゃんとで向き合って声かけして手渡

される絵本たち。これは、地域を挙げての子育て支援活動の一環です。市町村合併や福祉予算の削減が進む中、この活動が活発化したのは、今まで考えられていた以上に、絵本が月齢の低い子どもと大人との間によい関係を生み、また、その様子を見守る人たちにも驚きと共感を呼んだからであると思います。絵本を編集する仕事をしている私も、保育の場に絵本の役割があることを身をもって経験したことが、現在の本作りの原点になっていて、それを忘れずにいたいと思っています。

その体験をした、Nの話に戻りますが、Nが生まれたのは、暑い夏の日でした。Nは、私の父母にとっても初孫であり、また兄夫婦にとっても、待望

の赤ん坊でした。Nを兄夫婦の家に迎えてからは、大騒ぎの日々が始まりました。何をして「初めて」尽くし。泣いても笑っても、おしっこをして、うんちをしても、とにかくすべてが事件でした。眠っているのを眺めるだけでも安らかな幸せを与える存在に、私も単なる血のつながりだけではない、不思議な親近感を覚えました。

そこで私もおむつ替えを手伝い、証拠写真も撮り、大きくなったら「私もおむつをちゃんと取り替えたのよ」と、Nに話そうと企んだりしました。ただそれだけでは、本人はまず覚えていないでしょう。私も同じようなことを大人になってから叔母たちに言われるたびに、何だか恥ずかしかっただけで、叔母たちへの感謝の気持ちや親近感にはつながらなかったようだと気づいていました。

そこで、私のNへの愛情表現、私とNとの関係で後々本人も覚えてくれていそうなことは何かと考えて、思いついたのが「絵本」でした。それは、Nと

父母や祖父母との間で否が応でも築かれる関係の次に、叔母としての自分を意識して覚えていてほしいという、私からの勝手な願いからでした。また正直、この最初の身近な赤ん坊に、どんな言葉かけをしてよいものやらと思ひ悩んでいたのも確かで、そこに絵本があれば自然と言葉が出てくるのでは…と思ったのも一つです。

たまたま私は幼いころから本が好きで、成人しても兄弟共有の絵本もほとんど私が大事に保管し、さらに、社会人になって絵本を企画し販売する仕事にも就いていたので、私の部屋は本だらけでした。Nが生まれる前の年に、インドネシアのバリ島で子育てを経験した人が描いた絵本を出版する機会がありました。部屋の本棚にはその絵本のシリーズも並んでいました。何でも口に持つていくNには、まずはかじっても大丈夫な、合紙絵本がよいだろうという軽い気持ちで、私は本棚からそれを取り出し、週末ごとに、首が据わり始めたNに見せました。その絵本は柔ら

## 特 集

かな色合いの水彩や、はつきりとした色彩の切り絵風タッチで描かれていて、ほとんど言葉がなく、書いてあってもオノマトベ（擬音語・擬態語）のようなものだけでした。最初のころは抱っこしてこの絵本を開くと、手を伸ばしてつかもうとし、つかむと口を持っていくだけの繰り返しでした。

そのうちに、「ぞうさんがママと一緒にいるね」などと話しかけると、開いた頁の絵をじいっと見つめるようになりました。やがて「何だか楽しそうだね、踊ってるね。踊ってみようか、パッティパ、パッティパ！」と、Nを乗せている私のひざを上下に振動させると、うれしそうに笑うようになりました。私は調子に乗って絵本を投げ出して、その絵本の場面で描かれているように「パッティパ、パッティパ！」と口で繰り返しながら、同時に手をたたきました。すると、Nは声を出して笑いだしたのです。「こんなシンプルものに、こんなに喜んでくれるなんて！」。それはそれは楽しい発見でした。

Nは、このシリーズの中で、特に『リズム』『真砂 秀朗作 三起商行]が気に入ったようです。六か月過ぎには、「パッティパ、パッティパ！」と読むと、お座りして両手を握って振りながら、自分でお尻を上下させてリズムをとり、やがて、私のまねをして自分でパチパチ手をたたいて、にこにこ笑うことを繰り返すようになりました。七か月過ぎたあたりから、私がNの家に行くと（そのころには、この絵本は兄の家の本棚に移っていました）、私の顔を見た途端に、本棚まではいはいてその絵本を抜いて、私にハイっと言うように突き出し、「読んで！」とばかりに促すようになったのです。そして、その楽しい時間は、もちろんこの絵本にとどまりませんでした。

その絵本との楽しい時間はさらに数か月続き、やがて一歳過ぎたころからは少しストーリー展開が入った絵本にも興味を示すようになり、絵本も、一冊ではなく、三冊くらい読まないと満足しなくなっ

いきました。やがて毎週の定期的な「読み聞かせタイム」となっていたNとの時間でしたが、しばらくは、まずその「ほとんど言葉のない絵本」が導入としてあつて、それからほかの絵本に移る、といったことが繰り返されました。

毎週土曜日の朝六時くらいになると、隣の家との間の戸の鍵をガチャガチャ開ける音で私は眼を覚ました。そして、私の寝ている部屋のドアがあつたという間に開かれ、ドシドシ音を立ててNが入ってきます。本棚の扉がおもむろに開かれ、彼女はとっかえひっかえ絵本を抜いては戻しを繰り返し、その朝読んでほしい絵本を三冊選びます。そして、一人でトントントンと音を立てて階段を登り、二階のリビングのソファに、ちよこんと座り、私が起きてくるのを待っています。間もなく私が眠い眼をこすりながらリビングに行くと、「週末読み聞かせタイム」の始まりです。やがて三歳違いの弟が生まれ、その

甥のRも一歳くらいになると、そのひと時に合流するようになりました。

二人の絵本の好みは違いましたが、たいてい、各一冊は一月から三か月くらい変わらず毎週土曜、日曜と楽しみました。三冊目は私が新しいものを選んで読むか、もしくは二人のうちのどちらかが新しいものを選び出していました。二人は本棚の背や表紙を見ただけで選ぶので、たいてい最後の一冊はくるくる変わり、どちらかのお気に入りになるのはまるででした。それでも、もちろん二人が大満足し、その日何度も「読んで！」とせがんだものは、次の週にすぐにお気に入りになるものもありました。

この経験から、私は幾つものことを学びました。一つには、本当に子どもにとって絵本はそんなに多くなくていい、でも、お気に入り絵本は、読んでみないとわからないし、その出合いのきっかけづくりは、やはり大人の手と眼がある程度必要だという

## 特 集

ことです。絵本を開くと、めくるめく世界が広がっていて、それを子どもと共有することがこんなに楽しいなんて！ そんな頁をめくる体験は、まさに大人の手の間があつてこそでしょう。その部分が、ほかのメディアと違うところだと思います。

そしてそれは同時に、そのきっかけをつくる大人と子どもとの関係の構築と継続にもつながるのだと思います。たまたま私の部屋の本棚が身近にあつたNやRの場合は、その扉がいつでも開かれていて、その扉を開くこと、つまり、叔母である私の心の扉も同時に常にたたき続けたことが、絵本との時間、そして私との関係の継続につながつたのだとも思います。

また、最初にNが気に入って私も楽しんだ『リズム』などの新しい絵本から、私が兄弟と共に母に読み聞かせてもらった、出版されて二十五年以上たつている破れかけの絵本まで、NもRも、新旧問わず

絵本を楽しんでいたことに気づきました。そしてその新旧の絵本の共通点は、普遍性をもつた絵本だったということ。子どもを取り巻く環境の変化については常に叫ばれてきていますが、四半世紀以上の時間を生き抜いてきた絵本（市場に生き残っている場合、これらの本を“ロングセラー”と呼びますが）は、それでも色あせることなく、違う時代を生きてきた三世代以上の大人と子どもの心をとぎめかせ、震わせ、共感させる力をもっています。実際、児童書の売上げの九〇％近くがこのような既刊本であるそうです。

何よりも個人的に得た最良のご褒美は、この“週末読み聞かせタイム”を共有することで、NとRと私との個人的な関係ができたことです。大人にもこんな思いも寄らぬプレゼントをもたらしてくれる普遍性のある絵本を、一点一点大事にしていきたいと思えます。